

【エッセイ部門・優秀賞】

「介護」のこれから

鹿児島県立鶴丸高等学校 第2学年 中野 雅

この世に生まれてきたものには、必ず死が訪れる。獣も草木も、そして私も。生き物にとって、死はとても恐ろしいものだ。だが本来、生き物は死を迎える者のためには何もしない。親子ですらそうだ。親は子どもを必死に育て、子供を巣立たせる。子どもも熾烈な食物連鎖の世界を生き抜き、やがて親となってまた新たな命を育む。巣立った子供は二度と親の元には戻らない。そうやって、世代交代は続いていくのだ。親は、この犠牲になるのが自然界の基本原理であって、このプロセスは、昆虫から爬虫類、哺乳類全てに共通する、生き物としての本能であり、宿命なのだ。しかし、人間という種においては、この原理は通用しない。人間は一度自立した後も親との交流が続くし、最終的には親の面倒を見るのが一般的だ。ではなぜ人間だけが介護をするのか。

「人間だけが感情をもつからじゃないかな。ほら言葉使うしさ。」

私が尋ねたとき、父はこう言った。確かに、その通りかもしれない。「死」が人間にとってとても恐ろしく、避けるべきものであることに変わりはない。しかし、自立しておきながら、他人の死に悲しみや寂しさ、後悔、あるいは感謝の気持ちを抱くのはおそらく人間だけであろう。そして、誰にとっても親の死というのはおそらく自分より先に来るはずのもので、親との死別は人生で最も自らに影響を与える出来事となるに違いない。だからこそ、人は親の最期には少しでも多くの時間そばにいたいし、楽にしてあげたいと思うのであろう。だから、介護が存在するのだ。

また、調べていくうちに、新たに興味深いものを見つけた。儒教である。その中に、「子は親を敬い、親は子を心配する」という考え方があった。古代中国の時代から、親に子どもは仕えるべきだという「孝」の道徳的概念が存在していたことは、私にとって驚きだった。このように、人間は「孝」という概念や感情から、介護をするようになったと考えられる。

しかし、現実はどうだろうか。私は、2019年に神戸で起こった介護殺人が忘れられない。若い女性が祖母の介護に疲れ果て、祖母を殺してしまった事件。その若い女性は、家族からの支援すら受けられず、一人で仕事と介護を掛け持つ日々を送っていた。彼女の場合は、経済的な問題から、介護離職すらできずに昼夜介護と仕事に追われていたのだ。このように、一人で介護と自らの生活を両立させるのは、経済的にも体力的にも不可能だ。また、それ以外に、精神的な問題があると私は考える。ずっと頼ってきた親が、守らなくてはならない存在となること。自分を忘れること。いなくなってしまうこと。介護はこんな先の見えない不安と常に隣り合わせだ。

しかしそうなれば介護される親も辛い。思うようにならない我が身に苛立ち、子どもに気を使って息を潜めてしまう。互いの気持ちが行き違い、諍いにもなる。これでは親子ともど

も追いつめられてしまうだろう。これは理想の親子の形でも、死の迎え方でもない。結局もたらされるのは、介護疲れによる介護離職、介護うつ、介護殺人なのだ。

もちろん私は、人間が親を介護することはおかしいと言いたいわけではない。しかし、特に介護が負担となり、ストレスとなることは事実だ。育ててもらった恩を感じるからこそ、頼りであり目標である親が老いることへの恐怖や不安が生じてしまう。このように温かいはずの介護が、する側にとってもされる側にとっても辛いものになることは少なくない。

では、どうすればいいのだろうか。世の中には、誰にも迷惑をかけず、ぽっくり死にたいと願う人が大勢いる。しかも介護の大変さを身にしみて感じている人ほど、そう感じる傾向にあるようだ。しかし皆が願い通りになるわけではないし、超高齢化社会になりつつある今、介護の負担はますます増えていくだろう。そもそも、ポッキリ誰にも迷惑かけずに死にたいと願う社会は、本当に理想的だといえるだろうか。

ここでこそ、人間の特性を生かすべきだ、と私は思う。人はなぜ社会を作れたのか。それは、協力できたからだ。助け合いの精神、敬愛の心から生まれた介護が、孤独化を生み出すなんてあってはならない。

私たちはつい、自分がお世話になった人だからと、すべてを自分一人でため込んでしまいがちだ。けれど、私たちは人間だ。人間は一人では何もできない。頼ってもいい。というより、頼らなきゃだめだ。

どうせ介護するのなら、ともに思い出に浸り、最後の日々を分かち合う、楽しい介護を目指したい。私が祖母になる頃には、「介護よろしくね。」と気軽に言える社会でありたい。